ブームの渦中に巻き込まれて

話の肖像画

吉本興業HD前会長
万博催事検討会議共同座長
大﨑（おおさき）　洋（ひろし）（71）　14

《東京に赴任した昭和55年、「THE MANZAI」（フジテレビ系）で巻き起こった漫才ブームは、翌年5月にスタートした「オレたちひょうきん族」（同）により、怒濤（どとう）のつねりとなっていく》

それまで「箱根の山を越えられない」といわれていた関西のお笑いが、漫才ブームで一気に全国区になっていきました。横山やすし・西川きよしさんや笑福亭仁鶴さんらに加え、中田カウス・ボタンさん、島田紳助・松本竜介、ザ・ぼんち、そして西川のりお・上方よしおさんらが都内の各放送局や各地の営業で引っ張りだこになり、1日5、6組も上京する事態に。現場で彼らをフォローする僕は、いやが応でもブームの渦中に巻き込まれていったのです。

このころは毎朝5時に起床し、まず赤坂の事務所近くのホテルに行って前日に泊まった芸人さんを始発の新幹線や飛行機で大阪に送り帰す。東京駅や羽田空港で乗車、搭乗を見届けると、今度は始発で大阪から来る芸人さんを迎えて収録現場まで同行です。その後は一日中、放送局やスタジオなどを回って、芸人さんを次の収録現場や東京駅、羽田空港、ホテルに送り届け、さらに台本を取りに行ったりと、分刻みのめまぐるしい日々となりました。

収録現場では連日、番組スタッフとのせめぎあいです。特番の収録などは最初に出演者がそろってオープニングを撮影し、いったんはけておのおのの漫才やコントを収録、最後にまた全員でエンディングの撮影となるのですが、予定通りに進むことはなく、全部つきあうと3時間ぐらい現場にいなければいけない。他社の芸人さんもそうでしたが、後の予定がぎっしり詰まっているので待っていられず、「次がありますので」と連れ出そうとすると、ディレクターが「おい、待てよ」と。

「予定の時間は過ぎているじゃないですか！」「エンディングには出てもらわないと困るんだよ！」。そんな怒鳴り合いが日常茶飯事になりました。そのうち何も言わずにそっと出ていってもらうようになり、芸人さんがいないのに気付かれて「何やっているんだ！」と胸ぐらをつかまれたり。エンディングとオープニングで人が違うなんてことがよくありました。

ザ・ぼんちの「スーパーライブ」に押し寄せた観衆＝昭和56年7月、東京都千代田区の日本武道館

《現場以外とも戦っていた》

収録が深夜1時、2時に及ぶことはざらでしたが、事務所に戻ってもすぐ休むわけにはいきません。上司の木村政雄さんに「朝、ザ・ぼんちを羽田空港に送り、30分後に着いた明石家さんまくんとテレビ局に行き…」とその日の行動と、収録現場のディレクターは誰でこんな雰囲気で、と報告です。マンションで同居だったので、帰宅後もコーヒーを飲みながら厳しい指導も。ようやく自室で横になっても、翌朝また5時起きでホテルへ、という毎日です。

いつ寝ているのかというと、羽田空港や東京駅での送りと迎えの待ち時間を利用しました。タクシーの運転手さんに1000円を渡し、「1時間半したらまた羽田からテレビ局に送るんで、今から1時間、寝させてもらってええですか」と。タクシーでグワーッと寝て、1時間後に起こしてもらい空港ロビーへ。そんなことをほぼほぼ2年半やりました。

大阪の本社とも戦っていました。あれだけのブームなのに、本社はまだ芸人さんのメインの仕事は大阪の劇場と考えており、東京での仕事を勝手に入れるなと厳命していたのです。ところが木村さんは次から次へと仕事を入れる。大阪での劇場出演に穴があくことになり、別の人に代演を頼まなければいけない。「すんません、紳助・竜介はこの日、東京なんで、中田カウス・ボタンさんはあいてますか」と本社に頼むと、「勝手なことやってんじゃねえ！」とボロカスに言われ、ようやくまとまっても、今度は劇場の支配人に「聞いとらんっ！」と。

携帯電話がない時代で、2万円分くらいの百円玉を袋に入れて持ち歩いていて、それを公衆電話の横に積んで投入する。バチャーン、「すいません、そこをなんとか」「知らんわ」、バチャーン、バチャーン…。百円玉が次々に消えていく恐怖とも戦っていました。

（聞き手　産経新聞社・大野正利）

ようこそ陽希の冒険記

田中陽希

比叡山トレラン 途中棄権

3月は、まだ冬が舞い戻る季節でもある。冷たい北風が抜ける比叡山の稜線（りょうせん）には小雪が舞っていた。初出場の比叡山インターナショナルトレイルランは後半戦へ突入。寒さと脱水が相まって、中盤から両脚の筋肉系トラブルが発生した。

快調に飛ばすはずが、痛みをこらえての走りでペースダウンし、後続選手に次々と追い抜かれていく。意地でついて行こうにも足が止まってしまう。林道の長い下りではさらに体を冷やしてしまった。

実はレース前に不安要素があった。2月下旬から疲労と体調不良が重なり、予定のトレーニングを積むことができていなかったのだ。そのため、中盤以降は条件次第で足が止まるのではないかと一抹の不安を抱いていた。こんなことはこれまでのレース人生で幾度となく経験してきたが、その傍らにはチームメートがいて、たとえ弱音を吐いても支えてもらっていた。

チームを離れた今、この状況を好転させられるかは自分次第。だが、救ってくれたのは、冷たい雨が降る中でもエイドステーションで選手を迎えてくれたボランティアスタッフの皆さんの笑顔と声援、それに温かい補給食だった。

さらに、山の麓から聞こえてくる和太鼓の響きにも勇気づけられた。折り返しとなる40キロ過ぎに里へと下りた先で、地元の子どもたちが大人たちとともに元気よくばちを振る姿があった。その姿に感動を覚えた。和太鼓のドンドドドンドドドドンドドン！と絶え間なく響く力強い音が全身を駆け巡り、再び山へと向かう背中を力強く押してくれた。

しかし、残念ながら50キロ地点の関門に30分間に合わず、結果は途中棄権となった。ゴールラインに立つ完走者の姿を見て、自分の中に悔しい思いと次へ進む意欲が湧くのを感じ、京都を後にした。

（アドベンチャーレーサー）

比叡山インターナショナルトレイルランを途中棄権した筆者

田中陽希（たなか・ようき）過酷な自然の中を走り、カヌーや自転車も使ってチェックポイントを通過しタイムを競うアドベンチャーレーサー。14年には人力のみで日本列島を縦断しながら日本百名山を踏破した。明大時代までは距離スキーの選手。1983年生まれ、埼玉県出身。

心でキャッチボール

広岡勲

耐え切れない暑さ

まず人に会えば「暑いですね」から始まるほど、朝から耐え切れないほどの暑さが続いている。そんな中、6月27日のプロ野球、西武対日本ハム戦で注目されたのが西武・今井達也投手の緊急降板だった。

四回、81球目を投じた直後にマウンド上で膝に手をついてしゃがみ込み、ベンチ裏に下がったまま交代した。診断結果は「熱中症」。大事に至らなかったが、西武のエースに降りかかったアクシデントは大きな波紋を投げかけた。球団は7月8日の楽天戦から本拠地ベルーナドームで大規模ミストを稼働させた。

同様の事態は米大リーグでも起きた。6月21日、33度を超すカージナルスの本拠地ブッシュ・スタジアムではレッズのデラクルス選手が守備の際に嘔吐（おうと）した。34度だったカブスのリグリー・フィールドではマリナーズのソーントン投手がマウンド上で体調不良を訴え、トレーナーに抱えられて降板。場内警備員も熱中症で倒れ、救急搬送された。

地球規模の温暖化に伴い、各地で酷暑化している。私はここで高校野球のあり方を論じるつもりはない。ただ、鍛え抜かれた体を誇るプロ野球選手でもリスク事象となるなら野球のあり方、行く末を根底から考える時期に差しかかっているように思う。

生前、長嶋茂雄さんが話していた。「大リーグでは昔から『ベースボールはお天道さまの下でやるもの』との考え方。プロは見る側のことも考えなくてはならない」。プロ野球が室内競技になる日が来るかもしれない。

（江戸川大副学長）

健康医療

子どもの目 紫外線対策を

白内障の発症早まる恐れ

帽子やサングラス

猛暑下では、強い紫外線から目を守る対策が求められる。目の保護にはサングラスが効果的だが、国内での着用率は依然低い。特に子どもの目の紫外線対策は遅れている。伊藤医院（さいたま市）眼科の有田玲子副院長は、帽子や日傘、サングラスなどの使用を勧める。

紫外線量が近年増加する中、世界保健機構（WHO）は、紫外線が体に及ぼす影響の度合いを示す指標「UVインデックス」を活用し、対策を実施するよう推奨する。

紫外線が原因で起こる目の病気は、急性と慢性に分けられる。「紫外線角膜炎は紫外線による代表的な急性疾患で、『雪目』とも言われます。スキーや海水浴など、昼間に強い紫外線を浴びた数時間後に目が充血したり、涙が出たりといった症状が出ますが、大半は目を冷やすなどすれば自然治癒します」と有田医師。

一方、慢性疾患には白内障や、白目の組織が異常に増殖して黒目の方へ伸びてくる翼状片（よくじょうへん）、加齢によって網膜の中心にある黄斑（おうはん）部に異常が生じる加齢黄斑変性、まぶたの皮膚がんなどがある。

ダメージ蓄積

特に注意が必要なのは白内障だ。中年以降に発症するケースが多いが、「強い紫外線を小児期から浴び続けると、目の水晶体にダメージが蓄積し、発症が早まる可能性がある」。

目の紫外線対策の基本は、帽子をかぶる、日傘をさす、UVカット機能付きの眼鏡やサングラスで目を保護すること。「サングラスは目を守るために必要なものと考えましょう。抵抗があるなら、UVカット率が高い眼鏡でも効果が期待できます」

スポーツ人語録 6月

前進できる材料あった

大リーグ・大谷翔平

強い意思を持ってできた

柔道・阿部詩

ゴルフ　マヤ・スタルク（スウェーデン＝全米女子オープンでメジャー初制覇）「この試合に勝つことは小さい頃からの夢だった。こんなにうれしいことはない」

競馬　北村友一騎手（クロワデュノールで日本ダービー優勝）「クロワがダービー馬になれたことが一番。うまくエスコートでき、パフォーマンスを出し切れました」

テニス　カルロス・アルカラス（スペイン＝大逆転で全仏オープン2連覇）「2セットを奪われてから逆転したのは初めて。それを決勝で成し遂げたことが誇らしい」

柔道　阿部詩（世界選手権女子52キロ級で5度目の優勝）「（パリ五輪後は）すごく苦しい1年ではあったが、自分の強い意思を持ってできたことがこの結果につながったと思う。阿部詩という物語がまた始まった」

大リーグ　ドジャース・大谷翔平（16日のパドレス戦で2季ぶりに投手復帰）「結果的にはいまいちだったけど、自分の中でいいイメージを持って前進できる材料はいっぱいあったと思う。いい一日だった」

バドミントン　潮田玲子さん（日本協会の理事に就任）「まさかこんな役目を頂くとは現役時代には想像していなかった。アスリートとしての経験をどう還元していくかが大事」

プロ野球　ソフトバンク・小久保裕紀監督（交流戦で6年ぶり優勝）「カードの勝ち越しを掲げてきた結果、優勝まで届いた。リーグ戦に向けてもいい弾みになった」